

平に自然を測れば、前に述べた通り美なる部分もある代りに又醜なる部分も随分多く其中に含まれてある。

次に假に一步を譲つて自然を美なりと見做した所で、自然の美なるを感服せしめたならば、其生徒が必ず自然物を愛する様になるか否かが疑問であり、又自然物を愛することが果して奨励すべき程の善いことであるか否かが更に疑問である。世間では家を愛し國を愛し人類を愛し宇宙を愛する心を皆同一の心の異つた階段と見做し、愛の範圍の廣いほど尊いものであるかの如くに云ひ囃して居るが、我等の考へは大に之とは違ふ。家を愛し國を愛することには生物學上正當の理由が十分にあるが、之に反して宇宙萬物を愛すると云ふに至つては全く正當な範圍以外へ逼出した本能の錯誤的作用であると思ふ。抑も

人間は所謂社會的動物であつて社會を造らずには一日も満足に生存は出来ぬが、凡そ團體を造つて生活する動物では多くの團體が相對して生存し各團體が生存競争の單位と成る故、一團體内の各個體に利他の心がなかつたならば生存は全く覺束ない。斯くの如く利他心は社會的動物の生存に於ける必要條件である故、人間に限らず凡そ社會的の生活を營んで居る動物ならば必ず多少發達して居らぬことはない、蜂や蟻の社會的生活状態を觀察すれば此事は極めて明である。されば利他心なるものは生存の必要上より社會的動物に生じた本能と見做すべきもので、人類に於ける利他心も素より此理に漏れる譯はない。所が本能なるものは總て多少盲目的で屢々誤まるものであることは、聊でも動物の習性を調べた者の十分に知つて居る所で

ある。例へば或る種類の蠅は卵を腐肉の上に生み附けるが、之は孵化した幼虫が直に十分の食物を得るため、種屬維持に取つては甚だ必要な本能である。然るに天南星科の植物には腐肉の如き臭氣を發する花の咲くものがあるが、蠅が其所へ來て往々卵を産み附ける。又草の間を走り歩く蜘蛛の類は卵の塊を糸で包み恰も繭の如き形に造り、中から幼兒が孵化して出るまでは常に之を携へ保護して居るが、之は幼兒の安全のために頗る有益な本能である。然し若し人が試に其繭を奪ひ取り、其代りに紙片を丸めて投げ與へれば直に之を掴まへて繭であるかの如くに大切に保護し、甚しきに至つては鉛の玉を與へても矢張之を掴まへ、保護する積りで一生懸命に引摺り歩いて居る。斯くの如く本能なるものは屢々誤つた方向に向うても盲目的

に働き、其ため動物をして往々目的に適はぬ所業をなさしめるものであるが、人類の有する利他心も矢張其通りで、生存競争の單位なる一團體の範圍内で働いて居る間は生存上甚だ有效なものであるが、宇宙萬物を博く愛するまでに其範圍を擴げると、恰も蜘蛛が鉛の玉を大切に保護して居るのと同様な全く目的に適はぬ所業をする様に成つて仕舞ふ。強い光を放つ物體を視るときに、網膜上に其像の映じた所だけに光を感じるのみならず、之に接する周圍の部分も同じく幾分か光を感じるので、光が實際より大きく見えることを生理學では Irradiation と名けるが、我等から見ると自然物を愛すべく感ずるのは單に利他心の Irradiation に過ぎぬ。宇宙萬物を愛するとは今日人道の最高程度に思はれて居るが、以上の如き原因に基くもの故、實際

は唯利他心と云ふ本能の一種の錯誤的作用に外ならぬのである。人類及び自然を虚心平氣に研究すれば從來神聖視し來つたものの實は餘り神聖に非ざるを發見することが屢々あるが、我等は其度毎に認識に達する途中には多くの恥を堪へ通さねばならぬ、此事がなかつたならば認識の興味も極めて少ないであらう」と云ふた「ニイチ」の言葉を思ひ出すを禁じ得ない。

尙詳に考へて見るに自己を愛するばかりでは家は治まらず家を愛するばかりでは國が立たぬ故、家を愛し國を愛するとは人間の生存上必要であるが、此心は人間にては決して未だ發達し終た譯ではなく僅に芽を出し掛つた位に過ぎぬ。蟻や蜂の如き動物では力を協して團體のために働くと云ふ本能が十分に發達して居る故、各個體の生れながらに爲す所業は總て團體

の維持繁榮に適する様に成つて居るが、人間では此本能が未だ甚だ不十分であつて、唯捨置いては上下交々利を征めて國が危くなる故、人爲的に之を補はねばならぬ。其ため昔から自己を愛する心を廣げて自己を愛する如くに家を愛せよ、家を愛する如くに國を愛せよと云ふ教が出来て、愛の範圍が廣い程尊いとの感じが生じたのであらうが、宇宙萬物を愛するを最高の徳の如くに思ふのは、此傾向が盲目的に正當の範圍を超えて、其外までも脱出した結果である。一方へ曲つた棒を眞直に直すには反對の側へ曲げる積りで力を入れねばならぬ如く、極度の利己心に司配せられて居る人間等を教へるためには其反對の端まで引く位の積りでなければ丁度適當の所まで來ぬ故、子供や無智の輩に向うては極度の博愛を説くことが必要の場合もある。

やも知れぬが、宇宙萬物を愛するまでに廣げた博愛は、其自身のみ
みに就いて云へば全く以上述べた如き性質のもので少しも尊
いことはない。

又假に自然物を悉く愛することが善いとした所で、之が實際
に行はれ得るものであるか大に疑はしい。我々は衣食住ともに
自然物を用ひるの外に道はない故、生活して居る間は常に自然
物に迫害を加へざるを得ぬ。家を建てるには樹木を切り倒さ
ねばならず、餓を凌ぐには牛や鳥を打ち殺さねばならず、衣服を
造るには蠶の蛹を何萬億となく蒸し殺さねばならぬ、又米を得
るためには無數の浮塵子を鑿にせねばならず、單に薔薇の花を
賞玩するためのみにも數萬の蚜虫を殺戮せねばならぬ、其他今
日我々が自然物に加へて居る迫害を數へ挙げたら實に際限は

ない。凡或る自然物が人間に利を與へる場合は總て其物に向
うて迫害を加へて居るのである、又或る自然物が人間に害を與
へる場合には力を盡して其物を驅除せねばならぬ、利用厚生と
云ふのは取りも直さず自然物に迫害を加へるに當る。此等
は如何に自然物を愛する人でも苟しくも生活して居る以上は
止めるとは出来ぬ、鳥獸や魚肉を食はずに精進して居るとは出
來るが、其代りとして矢張他の自然物に迫害を加へざるを得ぬ
故實は五十歩百歩で著しい相違はない。されば自然を美なる
如くに説き、自然物を愛する情を生徒に起させ得たればとて其
働き得る範圍は人間に直接の利害の關係のない區域だけに限
られる故頗る狭くて殆ど態々獎勵する程の價もない。牛や豚
を以て餓を凌ぐ以上は如何に之を愛したとて唯從來五秒で殺

した所を三秒で殺す様に改良し得るのみで、矢張殺して仕舞はねばならず、牛馬に荷車を挽かせる以上は、如何に之を愛したとて唯從來七度苦つた所を五度に減じ得るのみで矢張苦つとを止められぬ。人間は自己の利益を捨てて掛らねば此以上に自然物を優遇することは出来ぬ故、自然物を愛すると云うても實際は單に感情だけに止まり、之を實行の上に現はすことは甚だ覺束ない。我國では牛馬が虐待せられて居るのを往々見受るが、之は最も拙な飼養法で人間に取つては甚だ不利益である故成るべく速に改良する必要があるが、之は利害損得の上からの論であつて此所に述べることは全く問題が違ふ。我等は素より自然物を無益に虐待するを賛成する譯でもなく、又他人の自然物を愛するのを妨げる考へもない、人間に利害損益の關係

のない範圍に於て自然物を優待するのは高尚な慰として甚だ結構であるが、唯有りの儘を述べれば以上の通りである故、強いて之を以て博物學教授の一目的とするには足らぬと云ふのみである。

以上述べたる如く我等の考へでは、博物學を授けて、生徒をして自然の美を感服せしめ自然物を愛する情を起さしめると云ふことは必要でもなければ又出来るでもない。博物學の倫理的價値は決して斯かることを人工的に生徒に説き込むのではなく、生徒をして虚心平氣に人類と自然とを觀察するの習慣を得しめて、人類と自然との有りの儘を知らしめる點にあるが、其倫理的效力の大なることは僅に自然の美を感じ、一部の自然物を愛する如きと同日の論ではない。凡そ人間に關することを

論ずるには先づ人間を知ることが必要である故、自然に於ける人類の位置を知るは總ての倫理的思想の根本であるが、之を知るには先づ自然の有りの儘と人間の有りの儘とを知らねばならぬ、而して之を教へるのが博物學である。されば博物學と倫理學との關係は甚だ親密であるべき筈で、決して從來の如く殆ど相知らずに離れて居るべきものではない、眞の倫理學は寧ろ博物學を基として其上に建つべきものである。

眞善美は常に竝べ稱して人の理想とする所であるが、其性質を比較すると眞と善美との間には著しい相違がある。前にも述べた通り自然は美でもなく、醜でもなく、美も醜も共に其中に含まれてあるが善惡に關しても之と同様で自然は善でもなく、惡でもない。善惡に就いて詳しく述べるを畧するが、善と美

との標準は常に我の方に有つて自然の方にはなく、我々は自己の有する標準に依つて他物を測り其美醜善惡を評して居るのである。之に反して獨り眞だけは標準が自然の方に有つて我の方にはない、自然自身の有りの儘が即ち眞の標準であつて我々は唯之を知るとに向うて徐々と進み居るのみである、而して眞に向うて進む方法は唯虚心平氣に自然を研究するより外にはない。我々の知識は何れの方面に向うても實に僅であつて、其境を超えれば全く知らぬのみ故、中々以て自然の眞即ち有りの儘を知るとは出来ぬが、常に怠らず苦心研究すれば漸々一歩宛眞を知る方向に進むとが出来る。地球の丸いを知るに至つたのも、其太陽の周圍を廻轉するを知るに至つたのも、微細な微菌が種々の病を起すことを知るに至つたのも皆眞に向うて

一步宛進んだ結果であるが、科學の求める所は即ち眞のみである。たとへ一步宛なりとも眞を知る方向に進みさへすれば、それだけ我々の知識の範圍が廣く成る故直に之を利用して生存競争上他に優る事が出来る。博物學に於ても専心唯眞を知るを目的として研究さへすれば實用上にも學理上にも莫大な利益を得られるのである。されば此學を授けるに當つても唯今日我々の有する知識の程度に従うて自然の眞を紹介し、生徒をして自身に自然に接して其有りの儘を知らしめるところを目的とすれば宜しい。善と美との標準は時により國により異なることがあるが、眞の標準は永久不變であつて、之に近づくのが即ち人智の進歩である故、或る目的のために故意に事實を曲げて教へたればとて其效能は僅に一時的に過ぎず、一般の人智が進

めば忽ち細工が現はれて仕舞ふ。

以上は唯所謂自然の美と、自然の愛とに就いて常に考へて居たことの概略を摘んで書いたのである。自然は美なりとか自然物を愛すべしとか云ふ考へは、教育學者や世間一般の人々のみならず、自然を研究することを専門とする博物學者の間にも甚だ廣く行はれて居る様であるが、我等は直接に自然を観察したる結果として、自然は美でも醜でもなく、又自然物を愛しても之を實行し得るのは無益無害の小區域内のみに限られると考へざるを得ぬ故、他と異なつた此意見を發表するのも或は多少の參考の資とならうかと思つて此所に掲げた次第である。

一〇 進化論に關する誤解

一 昨年春頃より種々の雜誌上に進化論に關する論評の現はれることが著しく多く成つたのは、我等の如く、進化論の一日も早く普及することを希望して居る者に取つては、極めて悦ばしいことである。何故かと云ふに、論旨の適不適は兎に角、進化論と云ふ文字が人の目に觸れる度数の多ければ多いだけ、人の注意を引くことも多く、之を調べて見たいと思ひ立つ人も自然に出來て、隨て一般の思想界の進歩を促すことに成るからである。然しながら、根本的に誤つて居る論評を其儘に捨て置いては、未だ進化論の何なるかを知らぬ人々が先づ斯かる論評の方を讀んで進化論を誤解し、或は進化論でないものを進化論であ

るかの如くに思ひ誤るの恐れがあるから、二三の氣の附いた點を此所に掲げて訂正して置きたいと思ふ。尤も總ての論評を殘らず讀み通した譯でない故、尙洩れた點は勿論澤山に有るであらう。

一

先づ第一に氣の附いたのは進化論自身と、多少の進化論を加味した或る一個人の哲學的見解とを混同して居る論者の比較的に多いことであるが、之は全く進化論と云ふものの性質を十分に知らぬより起つた誤解で、進化論が明瞭に解れば決して斯様な誤に陥るとは無い。抑も進化論とは何かと云へば、動植物ともに一々の種屬は決して萬古不變のものでは無く、長い年代の間には漸々變化するもので、初め一種類の先祖から起つた子孫

も後には遂に數種の相異つたものに分れ得ると云ふ事實を云ひ現はす論に過ぎぬ。語を換へて云へば總ての生物種屬は恰も一大樹木の如き形の系圖を有するもので、始め一本の幹も後には數本の大枝に分れ、大枝は又若干の小枝に分れ、尙細かく分れて遂に多數の末梢となる如くに、生物も始め少數の種類から漸々分れ變化して、種屬の數が増加し、終に今日見る如き數十萬の種屬が出来たのである。今日生存する各種屬は皆生物進化の大樹木の末梢端に相當するものであるから、溯つて調べて見ると總て互の間には血統が繋がつてをると述べるだけであるが、之は廣く生物界の事實を研究して、其結果から歸納的に推理した結論であつて、之だけの論に對しては解剖學上、發生學上、化石學上等、生物學の各方面に無數の證據があるから、今日の所で

は恰も地球が丸いと云ふのと同じく、最早動かすべからざる事實と見做さなければならず、學問上毫も疑ふことの出来ぬこと故、今日に於ては苟しくも生物學者と云はれる人の中には之に反對するものは一人もない。又近頃の雜誌上に現はれた論評の中にも之を駁したものは一つも無かつたが、これは如何に駁したく思つても駁することが出来ぬからである。

之に反して斯様な進化論を聞いて、各個人が胸の中に組み立てる宇宙觀や人生觀は、各其常人の智慧相當のものより出来ぬ故決して皆一樣では無く、種々雜多のものが出来て、其中には随分正反對の考があるかも知れぬ。而して如何なる宇宙觀、人生觀が出来上らうとも、それは各人の勝手に造つたもので、素より進化論の範圍以外であるから、之と進化論自身とを混同するの

は大なる誤である。例へば或る人は人間は下等の動物から漸々進化して今日の有様までに達したものであるとの説を聞いて次の如くに考へるかも知れぬ。即ち人間の先祖は蛆虫である。して見れば人間は蛆虫同様のものである、蛆虫同様のものが萬物の靈などと自稱して、鬚を生やし、高帽子を被つて意氣揚々として居るのは大に笑ふべきことであると、斯様に考へるかも知れぬ。又他の一人は同じ説を聞いても前者とは正反對に「我等の先祖は蛆虫であつたが、常に他の動物に打勝ち、漸々進歩して終に今日の人間となつたのである、之は決して他の動物の眞似の出来ぬことである、此點に於ては實に人間は萬物の靈と云うて宜しい、我等は先祖以來の此光榮ある歴史を受繼いで、益々進んで尙一層靈妙なるものと成らねばならぬ」と考へるかも知

知れぬ。斯様に同じ進化論を聞いても、之を基として胸中に造る人生觀は、各人の生來の性質により、智慧の程度により、過去の經歷により、現在の境遇により、或は天氣の晴雨により、又は胃腸内の食物の消化不消化により、幾通りでも異つたものが出来るが、如何なるものが出来ても之は總て進化論とは全く別物で、決して之と混同すべきものではない。

昨年来種々の雑誌上に現はれた論評の中で眞の進化論を駁したものは一つも無いが、進化論を攻撃する如き口調で論じて居るものは澤山にあつた。然して孰れも皆進化論を基とした一種の人生觀を攻撃して居るのみであるが、其人生觀も多くは實際或る進化論者の抱いて居るものではなく、評者自身が進化論を聞き囁り、之を基として、自身の智慧相當の程度で一種の人

生觀を造り、進化論者は恐らく斯く考へて居るのであらうと想像して、頻りに之を攻撃して居たのに過ぎぬ様である。

二

次には、生物進化論と「ダーウイン」の自然淘汰説とを區別せぬ人が甚だ多いが之も大なる誤解である。進化論の方は生物界を研究して知り得たる生物進化の事實を述べるものであるが、人間には生れながらに物の原因が知りたいと云ふ欲が備はつてあるから、單に事實の存在を説いただけでは尙不満足で、必ず其事實の起る原因を究めなければ、氣が濟まぬ。それ故生物進化の事實が稍々明になるや否や、何故生物種屬は漸々進化するものであるかと云ふ其原因を説明するための學説が幾つも考へ出された。「ダーウイン」の自然淘汰説は其中の一である。尙其外

に昔の「ラマルク」の用不用説、近頃の「ドブリース」の突然變化説など、今日でも相應に有力なるものが幾つもある。されば「ダーウイン」の自然淘汰説と生物進化論とは明に區別すべきもので、たとへ今後に至り「ダーウイン」の自然淘汰説が全く誤りであると認定せられる時代が來たと想像しても、眞の生物進化論の方は其爲に毫も影響を蒙むることはない。

斯かる相違のあることも辨へず、生物進化の事實も、之を説明するための「ダーウイン」の自然淘汰説も一所に混じて仕舞ひ、生物進化の事實までも「ダーウイン」が一人で机に向うて考へ出した一種の説であるかの如くに思つて居る人のあるのは、生物界に關する知識が未だ普及せぬ故である。「ダーウイン」一派の進化論者の説に隨へば、人間は下等動物から漸々變化して生じたるもの

であるなど云ふ文句を見ることゝが屢あるが、斯様な文句は生物進化の事實が未だ十分に確定せぬ時代ならばいざ知らず、今日に於ては「コペルニクス一派の地動論者の説に随へば地球は動くものである」と云ふのと同様で、甚だ時代に遅れたことである。此等の事實は兩方ともに人間の知識の進歩するに随ひ發見せられたことで、最初之に氣の附いたのは誰であつたにもせよ、更に一層知識が進めば最早誰も之を否定することの出来ぬ様に成つて仕舞ふもの故、決して從來の哲學などに見る如き誰の説であるとか、何派の主張であるとか、境を限つて論ずべき性質のものではない。

三

次に、進化論は唯物主義であると論じて居る人があるが之も

誤解の一つである。進化論を基として其上へ唯物主義の哲學を積み立てる人は有るかも知れぬ、又進化論を基として神の存在を主張する人が有るかも知れぬ、然しながら之は孰れも眞の進化論の範圍以外である。唯物主義では宇宙は唯物質のみより成り、其外には何もないと絶對的に斷言するのであらうが、人間は下等動物から漸々進化し來つたもので、智慧も身體も今後尙進化するものであらうとの考から見ると、何事でも斯く絶對的に斷言することは今日の人間には出来ぬことらしく思はれる。自分の想像臆測を少しも加へず、單に進化論のみから説を立てれば、決して唯物主義にも成らず、又唯心主義にもならぬ。宇宙の第一原理とか、人生の本義とか云ふ様な問題に對しては、唯「知らぬ」と答へるの外はないのである。Agnosticism と云ふ字を

「不可知論」と譯する人もあるが、之は寧ろ「不知論」とか「不知主義」とか譯した方が適當であらう。人間は過古にも進化し來り、未來にも進化し行くものとすれば、恰も行先の知れぬ船に乗つて航海して居る様なもので、明日如何なる港に著いて如何なる物を見聞するか、明後日如何なる方向に進んで如何なる經驗を歴るか解らぬのであるから、唯今日現在の智慧と經驗とに基いて宇宙を可知部と不可知部との二つに分け、不可知部に屬するとは未來永劫我等は知るを得ない (Ignorabimus) と絶斷的に斷言する様なことは到底出來ぬ。唯知らぬことに對して單に我等は知らぬ (Ignoramus) と云ひ得るのみである。此見解が即ち (Agnosticism) で進化論のみから立て得る主義は此外には無い。

されば進化論を評する積りで唯物主義を攻撃する如きは全

く見當違ひで、恰も進化論を加味した或る種の人生觀を攻撃するのと同様である。進化論は從來行はれて居た誤謬を打破るには極めて有力なものであるが、必しも直ちに其正反對の事を證明する譯ではない。然るに或る學説が進化論のために其根柢を動かされる場合には、今まで其學説に歸依して居た人等は進化論を以て其反對の學説の肩を持つものと見做して、恐らく斯く攻撃するのであらう。

四

又道德、宗教は進化論以上のものであるとか、教育は進化論以上のものであるとか書いてあるのを見たが、此等も全く進化論の性質を誤解して居るから起つたことである。前にも述べた通り、眞の進化論は單に生物界に廣く現れた事實を述べるだけ

のもの故、宗教、道德若くは教育と其位置の上下を比較すべき性質のものではない。「道德は進化論以上である」と云ふのは恰も「道德は地動説以上である」とか、或は「道德は重力以上である、電氣以上である」と述べるのと同様で、殆ど何の意味もないことである。進化論なるものの性質を明に心得て居れば斯様なことを書く譯はないが、眞の進化論と、進化論を加味した或る種の宇宙觀、人生觀とを混同し、後者の方を進化論自身であるかの如くに誤解して掛る故、斯様な相違ひも生ずるのである。進化論を調べて見たいと思ふ人は、初から此區別を明かに心得て、決して彼此混同せぬ様に注意せねばならぬ。

五

進化論で總てのものを説明し盡すことは出来ぬと論じて居

る人もあるが、之は無論のことと改めて辯ずるまでもない。凡そ説明と云ふのは多くは或る事件に對して其直接の原因を述べるに過ぎぬが、一事に對する原因には又その起つた原因が無ければならず、原因と結果との連絡は恰も鎖の如く、何所までも續いて行く故、何事でも説明し盡すと云ふことは到底出来ることではない。例へば物の焦げる香のする時に紙の燃えて居るのを見附け、紙が燃えた故焦げる香がしたのであると云へば一通りの説明は附いた體裁になるが、それならば何故に紙が燃えたかとの間が次に起る、然して之に對して「マツチに火の附いたのを投げたから」と云ふ説明を與へれば、其次には更に又「其人は何故マツチを投げたか」との間が生じ、斯くして何所まで行ても實際はない。如何なる方面でも五回か七回「何故か」と云ふ問を

繰返して尋ねられたら必ず返答に窮して仕舞ふ。されば我等人間は限なき原因結果の鎖の中程に在つて、原因の方向に向つては五六個の輪を探り、結果の方向に向つては一二個の輪を漠然ながら臆測することを得るに過ぎぬ。學問の目的は即ち一個でも多く先まで此鎖の輪を探り當て、之を人間の勢力範圍に入れやうと務めることである。斯様な譯であるから、總てのものを説明し盡し得ぬものは獨り進化論のみではない、如何なる學說でも理論でも此點は同様で、元來斯の如きことを望む方が間違つて居るのである。

西洋諸國で宗教家が進化論の普及を妨げるために之を攻撃した態度を見るに、初めの間は進化論自身を駁したが、生物進化の事實が漸々確實に證明せらるる様に成つてからは、之を攻撃す

るも無益であるを悟り、其後は唯進化論は唯物主義である如くに説いたり、又は進化論で説明の出来ぬことが尙多數にあると云うて攻撃するばかりと成つた。唯物主義と云ふ名前は從來神靈は尊いもの、物質は卑いものと覚え込んで居る人々の耳には多少不道德のもの、の如き感じを與へる故、此點を利用して進化論の普及を一日でも遅からしめ様と務めて居る者は今日でも尙幾らもある。又進化論で説明の出来ぬことが世の中には尙澤山にあると説けば、事理を辨へぬ輩は、して見ると進化説も左程有難いものではないとの考へを起し易いから、之も亦進化論の普及を妨げるために一時利用が出来ぬこともない。然し孰れも單に一時的の效力を有するだけで、到底長く續くべきものでない、生物進化の事實が教育の進歩と共に普く知られるに

至るは少しも疑のないことである。我國でも進化論のために根柢を動かされる様な種類の學科を修めた人は、恐らく種々の手段を盡して進化論の普及を遅からしめんと務めるであらうが、眞の進化論は前にも述べた通り唯確定した事實を述べるだけで、決して議論の勝負に依つて其當否を定める如き性質のものでないから、之を攻撃する譯に行かぬ故、矢張り此所に掲げた様な論法を用ひる外に道は無いであらう。

六

以上述べた通り近頃雑誌上に現はれた進化論に關する論評の中には、進化論を誤解して居るものが甚だ多い、中には「進化論も結構であるが進化論の一點張りでは大間違ひである」などと云うて、恰も進化論者は進化論で萬事を説明し盡さうと試みる

かの如くに考へて居る人もあるから、進化論に關する我等の主張を少しく此所に述べて明にして置きたい。

我等は決して進化論に依て己に萬事を説明し得るとは考へぬ。唯進化論の述べる所は今日の所では己に確定した事實である故、之と兩立せぬ様な學説は總て誤謬として退けなければならぬ。進化論が思想界の進歩を促すのは即ち此點である。従來人の信じて居た學説の中には先づ進化論と矛盾する事柄を假定し、其上に積み立てたものが幾らもあつたが、此等は進化論のために當然潰されて仕舞ふ故、更に其代りに進化論と矛盾せぬ學説を考へ出さねばならぬ。斯くして誤れるものが退けられ、新なる方法に依つて更に研究が行はれるので思想界に一大進歩が生ずるのである。

此所に一つ斷つて置くべきことは、生物進化論は單に生物界に現はれたる事實を述べるだけのものであつて、決して從來世に行はれて居た如き哲學說に對立した或る新しき哲學說を提出する譯ではない。進化論は有神論者からは無神論と見做され、唯心主義に傾いた人々からは唯物主義と名づけられ來つたが、これ等は孰れも論者の誤解から起つたことである。進化論は唯今日の經驗科學に依つて知り得た事實のみを述べるもの故、神は無いと斷言したり、世界は物質のみから成り立つて居ると主張したりすることは皆其範圍以外のことで、決して進化論と同一視すべきものではない。已に前にも述べたことではあるが、これは特に注意して置かねばならぬ點である。

我等は決して進化論の一點張りて宜しいとは考へぬ。然し

ながら、人間が下等動物から漸々の進化によつて今日の有様に達したものである以上は、人間の身體は云ふに及ばず精神的の作用でも社會の組織でも皆一定の進化の徑路を歴て來たことは明である故、苟しくも人間に關する事項を研究する學科ならば、必ず進化論を認めて常に之を眼中に置き、適當の研究方法を用ひて調べなければならぬ。進化論を無視し、人間の過去の進化を度外視して、唯現在の人間のみに就いて研究しては何れの方面に於ても決して正常な解釋を得ることは望めない。比較解剖學、比較發生學、化石學等の研究によつて今日の生物界の事實が初めて多少明になつたことから考へると、經驗を基とする比較研究法、歴史的な研究法が今日の所唯一の眞の研究法であるは疑ない故、生物進化の事實が確である以上は、哲學でも倫理でも、

心理でも、教育でも、苟しくも人間に關する學科は皆此研究法により、現今の各程度の人種及び各動物を比較し、小兒から成人になる間の變化を調べ、又古代より今日に至るまでの社會の發達變遷を研究し、其結果を廣く集め、之を基として立論しなければ決して正當な知識は得られぬ。斯様な理由から我等は如何なる學科を修める人も必ず一通り進化論を心得て、常に之を忘れてはならぬと主張せざるを得ぬ。再び繰り返して云ふが我等は決して進化論に依つて萬事を解釋し盡し得ると云ふのではない、唯進化論を度外視しては何れの學科でも決して正當の眞理を發見することは望まれぬと斷言するのみである。

進化と人生終

明治三十九年六月二日印刷
 明治三十九年六月五日發行

進化と人生
 定價金六拾錢

著 作 者 丘 淺 治 郎
東京市小石川區小日向水道町七十三番地
 發 行 者 西 野 虎 吉
東京市京橋區築地三丁目十一番地
 印 刷 者 野 村 宗 十 郎
東京市小石川區小日向水道町七十三番地
 發 行 所 東 京 関 成 館
(長距離加入) 電話番町三五五番
 大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷
 發 賣 者 三 木 佐 助
東京市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷
 發 賣 者 林 平 次 郎
東京市日本橋區數寄屋町九番地

不 許 漢 譯
 著 作 權 所 有

14/9/39

所賣販書圖行發館成開

館成開(阪大)所賣卸部西 郎次平林(京東)所賣卸部東

東京府 丸善、中西屋、東京堂、勉強堂、日本堂、服部、岡崎屋、大阪府 柳原、丸善、松村、小谷、三宅、伊澤、
 吉岡、中村、北村、京都府 松田、村上、若林、河合、大黒屋、關見、神奈川縣 弘集堂、田沼、丸善、福岡縣 吉
 見、谷島屋、文林堂、山梨縣 柳正堂、愛知縣 川瀬、星野、永東、三輪、伊藤、三重縣 別所、伊藤、安屋、岐阜縣
 郁文堂、岡安、福井縣 品川、西村、石川縣 宇部堂、近田、富山縣 中田、學海堂、滋賀縣 島林、古川、廣田、兵庫縣
 熊谷、吉岡、中井、福浦、石田、木村、奈良縣 阪田、木原、中川、和歌山縣 宮井、松崎、徳島縣 黒崎、小野
 香川縣 宮脇、北村、入江、愛媛縣 向井、土肥、杉山、高知縣 澤本、岡山縣 博文堂、武内、吉田、仁科、廣島縣
 積善館支店、田上、兒玉、鳥取縣 徳岡、横山、今井、島根縣 川岡、岡山、石田、安達、山口縣 小原、桂、白銀、
 藤川、福谷、村田、重野、大分縣 甲斐、野依、梅津、中園、福岡縣 積善館支店、博文社、眞海書店、菊竹、田中
 佐賀縣 河内、牧川、長崎縣 安中、集榮堂、熊本縣 長崎 鹿兒島縣 吉田、久永、宮崎縣 津野、松井、沖繩縣 有
 馬、小澤、埼玉縣 高野、いろは堂、伊藤、千葉縣 多田屋、立眞舎、朝野、茨城縣 川又、寺田、伊沼、塚越、進
 々堂、栃木縣 内田、内山、永山、群馬縣 煥乎堂、文心堂、長野縣 西澤、水琴堂、福澤、日新堂、新潟縣 北光
 社、目黒、覺我、萬松堂支店、高橋、福島縣 陽文堂、盤活堂、上野屋、佐藤、宮城縣 藤崎、弘道館、高橋
 岩手縣 佐藤、文港堂、青森縣 今泉、近松、浦山、伊吉、山形縣 牧野、五十嵐、日向、白崎、秋田縣 成見、大
 島、大澤、東海林、藤島、北海道 野原、富貴堂、魁文舎、川南、白鳥、村上

東京高等師範學校教授

理學博士 丘淺治郎先生著

進化論講話

修正第五版全一冊
紙數八百四拾四頁
廉賣價壹圓廿五錢
内地小包料拾五錢

加藤博士嘗て本書を讀みて進化論の大意を通俗的に講話された手際は
 實に上手なもので痒き處に手の届くといふ様に説てある丁度へツケル
 自然造化史を今一層平易に書てあるから素人にも解らぬことはない
 せられし如く本書は進化論の説明其歴史事實ダーウイン後の進化論自
 然に於ける人類の位置進化論と哲學倫理教育社會宗教との關係等を博士
 獨特の明快の見平易の語もて湧くが如き趣味を加へて縦横講述せられた
 るものにして實にダーウイン主義の福音明治出版界最良の著述として世
 評噴々たり

發行所

東京市小石川區小日向水道町七十三番地 東京開成館

東京高等師範學校教授

理學博士 丘淺治郎先生著

生物學講話

全一冊 近刊

今日の生物學は古の所謂本草博物學にあらずその目的とする所は動植物の構造、作用、生活の状態、發生の順序等より其進化の徑路に至るまでを實驗と觀察とによりて研究し生物學に現るゝ現象の原因を探求する生物實驗哲學にして人生と最も密接の關係を有し百般學術の基礎となるべきものなり著者が本書を記述する亦基本學科としての生物學といへる精神を以てし敘述の體裁は進化論講話と齊しく趣味最も豊富也

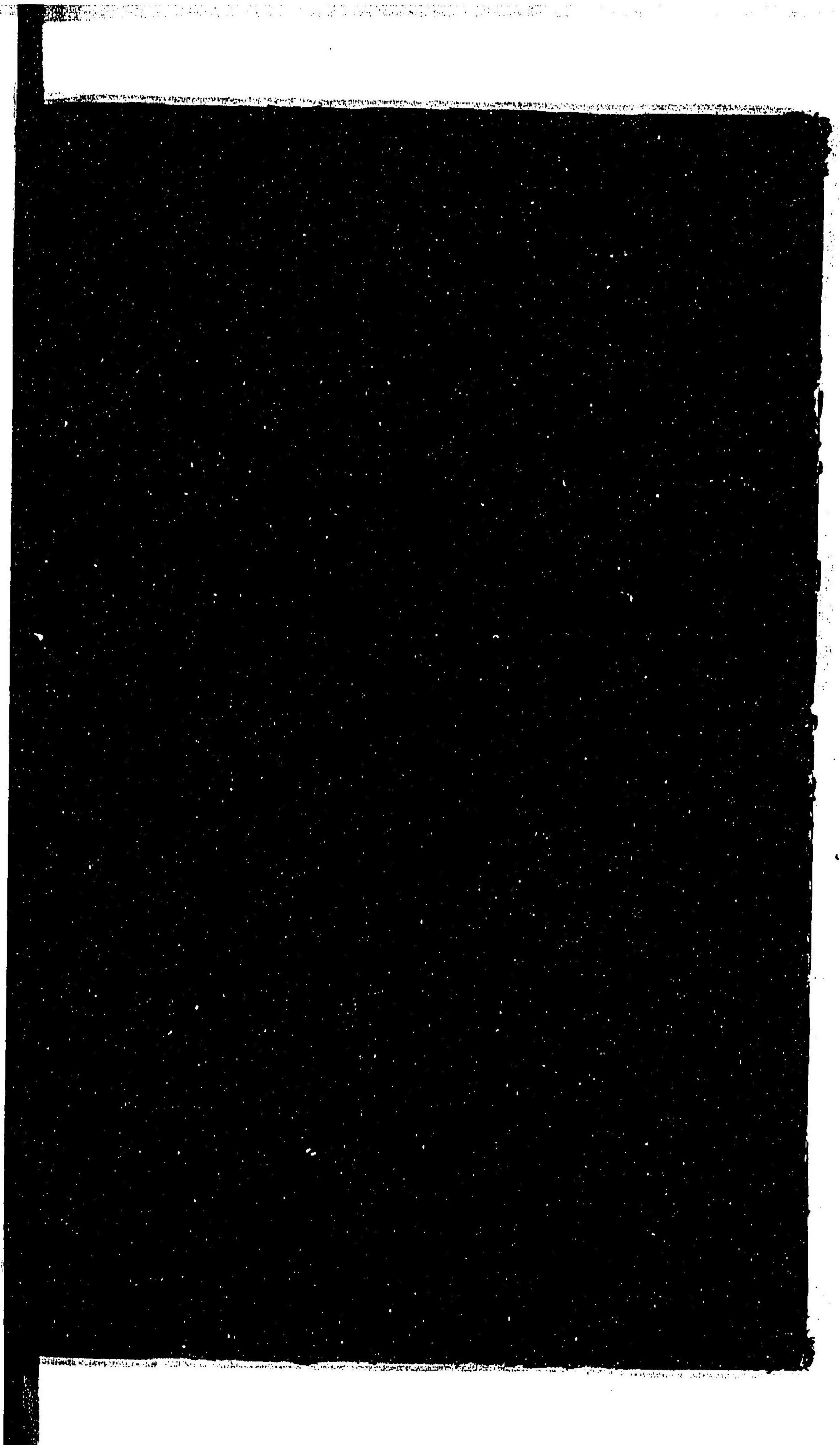
發行所

東京市小石川區小日向水道町七十三番地

東京開成館

2/

40
663



057047-000-5

40-663

進化と人生

丘 浅次郎/著

M39

CAP-0091



